

社会に生きる、仕事に生きる、自分らしく生きる。  
これからの社会を豊かに生きるために、学びの意味は大きくなるばかり。  
そこに、これまでとは違う、学びのフロンティアが拓けてきている。  
HRIが選んだ3つの学びの場を通して、  
近未来への学びの本質を探った。

## 「学びの場」に関するフィールドレポート

# 先進事例からみる

# 「学び」

HRI社会研究部 研究員

三浦 彩子  
山縣 いつ子  
吉澤 康代



福祉コンビニでのデイサービスの様子(ニュースタート事務局)



週に1度の鍋会。ここで働くスタッフの家族もたまに顔を出す(同上)

## 引きこもりの若者たちの

## 「新たな出発(ニュースタート)」を支援

### 引きこもり解決3点セット

現在、わが国では「6カ月以上、家族以外との人間関係を持たない」引きこもりの若者が80万人とも100万人とも推定されている。2001年に厚生労働省が行った全国調査によると、保健所などに寄せられた年間6151件の相談のうち、21歳以上の相談例が約60%、5年以上引きこもっている例が25%を占めていることが分かり、事態の深刻さを浮き彫りにした。

NPO法人ニユースタートが、引きこもりの若者の問題に着目し、その解決に乗り出したのは1993年のことである。その後9年間で、約500人の引きこもりの若者が社会復帰するのを支援してきた。

ここでは、同法人が行う独自の方法「引きこもり解決3点セット」と呼ばれる活動を紹介する。

若者を外へ連れ出す

引きこもっている若者の周辺にいる大人(主に両親)から、「ニュースタートへ相談がくると、「レンタルお兄さん・お姉さん」と呼ばれる、引きこもり青年と同世代の若者が派遣される。まず、部屋の扉を開けるところからスタートし、さまざまな形で引きこもる若者と話をする時間を持つのだ。ときには外で一緒に散歩したり、映画を観に行ったりもする。

ちなみに、引きこもりの青年たちが、自ら外に出ようと思つまで、個人差はあるが、平均1年はかかるという。

「若衆宿」での共同生活

こうしたアプローチによって、外で活動しようという気になった引きこもりの若者は、ニュースタートが持つ「若衆宿」での共同生活を始めるか、その他の道へ

進むか、選択を迫られる。彼らのおよそ半分は、新たな場所でのスタートを望み、「ニュースタートには行きたくない」と言っただけ。それはニュースタート側にとっても願ったりかなったりで、「ニュースタートに来ないのであれば、他の選択肢を自分の力で考え、実行せよ」と次のステップを判断させることができる。残りの半分は、「若衆宿」に移り住み、他の若者とともに共同生活を始める。

#### 仕事体験塾で社会体験

解決のしめくりとして、彼らは、働く場を体験できる「仕事体験塾」で、週に3種類以上の仕事をやる。

#### 福祉コンビニ

ニュースタートの本拠地である行徳にオープンした「福祉コンビニ」で、福祉に関するあらゆることを気楽に請け負う。メインは高齢者のデイサービス。毎日7、8名、1週間でのべ40名ほどの高齢者が集つ。その他に、訪問介護、託児、何でもお手伝い屋などの仕事がある。

#### 普及料理「マンマ」

専門家の指導のもとで、寮生が思い通りに通常の食事を作り、来店するお客様に提供する。buffet形式の1回盛りきり制、料金は満足度に応じてお客様が決めるというユニークなシステムをとっている。

#### 子育て長屋

行徳センター（福祉コンビニ）若衆宿（内のマンション）の2、3階に子育て中の家族が住み、互いに助けあえる環境をつくる、というもの。子育て支援などの仕事を若者が請け負う。

#### その他

喫茶店「縁側」、EIT事業部「タウンタウン」の運営など。

ニュースタートの活動内容はこれだけではない。全国の引きこもりで悩む家族や若者への講演会活動、各活動を複合したイベントなど、その取り組みは幅広い。2002年8月にフィリピンのマニラに若衆宿第8号をオープンしたのを皮切りに、海外拠点も積極的に広げている。月に1度の会議で各活動の情報を共有し、多くの人がかかわれるよう、共同プロジェクトも進めている。

そうした中から自分のやりたいことを見つけて出せばそれでいいし、求める仕事を彼ら自身の手でつくり出せるような仕組みも整えられている。

#### 活動すべてが「学び」につながる

ニュースタートでは、引きこもりの若者だけが学ぶのではない。

引きこもりの若者を外に連れ出すレンタルお兄さん・お姉さん。事務局のスタッフ。デイサービスに来るお年寄り。子育て長屋の家族。「縁側」や「マンマ」に立ち寄る人々。引きこもる若者が仕事体験塾としてかかわる場に、それだけの人々が同時にかかわり、関係を築き、学んでいく。

引きこもる若者は「社会体験」を学ぶ。レンタルお兄さん、お姉さんも彼らを通して、日本社会に潜む病理を目の当たりにし、その解決策を学んでいく。さらにデイサービスを利用する人や長屋にいる家族もその場にかかわることで、さまざまな人とのつながりを学ぶのである。

彼らの活動の根幹は「引きこもる若者を社会へ」ということである。しかし、決して現代の社会に適応させることだけを目標としているわけではない。それは彼らの緩やかなテンポに表れている。現代社会はファーストな動きを求められがちだが、子どもやお年寄りなどはスローなテンポを好む。このようなスローワーク、スローライフこそ、これからの日本社会に必要なものだと言えないだろうか。ニュースタートにかかわる人々は、互いに助けあふ関係を保ちながら、個人としての自立以上に、集団として現在の社会から自立することを目指しているの

である。

\*

週に1度、行徳センターで行われる鍋会に私も参加させてもらった。中身は「何でも。気分次第」。まるでその場に参加している人々のように多種多様である。初参加の私も何の違和感もなくその場に溶け込んだ。そこで、「マンマ」で働く青年と話をした。

「マンマで働くのは結構大変なんだよな。昼も夜も寮生はたくさん来るし。でも、プロの先生から習つのはすごいことだし、いつかレシビを見ずに自炊できればいいなと思つ」と語る彼の表情が、大変と言いつつも楽しそうに見えたのは私だけだろうか。

（山縣いづ子）

特定非営利活動法人ニュースタート事務局  
代表者・理事長 二神能基  
事務局所在地 千葉県浦安市美浜1-3-1  
10006  
電話 0471-3521-7399  
設立 1999年6月  
http://www.new-start.jp/org/index.php3  
NPO法人ニュースタートでは、「若者をキーワードに、レンタルお兄さん・お姉さん」活動および育成講座の開催、「大学不登校を考える会」の開催、「若衆宿」の運営、「介護」、「託児」、「何でもお手伝い屋」複合センターの運営などの活動を行う。

# ビジネスパーソンの「継続的な学習(Continuing Learning)」を支える

1万5000人が受講「夕学五十講」

夕方6時半から8時半まで、丸の内シテイクャンパス(東京)が開催する「夕学(せきがく)五十講」。各分野の第一線で活躍する人を講師に招き、年に50の講演が開催される。「丸の内」という場所柄、ビジネス・フィールドを中心に幅広い講演が設けられ、首都圏のビジネスパーソンや社会人に学習のきっかけを広く提供している。2001年4月にスタートし、各回の定員は200人。半期に数回は定員をオーバーし、これまでの受講者は、のべ1万5000人以上にのぼる。

スタートして一年半あまりだが、ビジネスパーソンの「知」の拠点として定着しつつある、丸の内シテイクャンパス(以下、MCC)。ここではそのコンセプトやプログラムなど、これまでの取り組みを紹介する。



事例を用いた模擬交渉「ビジネスプロフェッショナルのための交渉学」

## 次の時代を見据えて自らを改革

MCCでは、社会人の「学び」には終わりがないと考えている。すなわち、「Continuing Learning(継続的な学習)」

である。めまぐるしく変化する社会では、次の時代を見据えて自らを変革し続けなければならない。その変革を支えるのが「学習」である。学習といっても、単に新しい知識やスキルを身につけることではなく、環境の変化に適應するため「自らの行動や態度を変容すること」を捉えている。習得した知識やスキルを実践の場で使うことで、自らを変革していくのである。

MCCはこのような学習を継続的に「行える場」を提供しているだけでなく、「知の交流による新たな価値創造の場」としても機能している。「いつでも・どこでも・誰とでもコラボレーション」をコンセプトに、メインキャンパスでは可動性・回転性の高いイス・机が配置され、ライティングテーブルや三面鏡型ホワイトボードなど、施設面からの工夫も施されている。

プログラムは、セミナー形式だけでなく、参加型のワークショップに力を入れている。プログラムによってはメーリングリストが設定されており、受講者が、熱意のある人々との「交流」を通じて、互いに知識や経験を共有している。このように、「知の交流」を深めることで、問題解決に取り組むという新たな価値創造の場をつくりだしているのである。

## 能力開発のための3つのプログラム

MCCでは、ビジネスプロフェッショナルの能力開発を目指し、ビジネスに密接に関連したテーマを取りあげ、独自のプログラムを展開している。そのプログラムには3つのタイプがある。

レクチャー&セミナー  
社会観・人間観を養う

このタイプのプログラムは、社会動向を探ったり、教養を深めるためのレクチャーや専門セミナーで構成されている。冒頭の「夕学五十講」はこのタイプにあたる。2002年度後期は、7つのテーマを軸に全26回が開催された。会員登録後、関心のある講演を自由に選び、予約して受講するシステムになっている。「先端知」サーチカンファレンス  
専門性を深める

このプログラムでは、ビジネスプロフェッショナルとしての「真の専門性」を深めることに注力している。MCCでは、真の専門性を、単に「知識を有していること」ではなく、それらの知識をもとに「深い議論ができること」と定義している。実際にこのプログラムでは、さまざまな領域の先端的な(もしくは最新の)課題について、探索的な議論が行われている。

今年度はキャリア・アーキテクチャー論「顧客価値創造のための戦略的アプローチ」というテーマを取りあげた。どちらも定員は25名、数回から10回程度のシリーズである。講師のプレゼンテーションや問題提起をもとに活発な議論を展開するため、受講者は参考文献等の読み込みや課題といった事前の準備が必要になってくる。

「知的基盤能力」開発ワークショップ  
「仕事の方法論」を学ぶ

時代の変化に合った知的基盤能力を身に付けるために、「仕事の方法論」をワークショップ形式で学習するプログラム。ビジネスの現場で実際に活用することを前提に、実践的なスキルや手法、分析や解釈のための理論的枠組みを習得する。

現在、「マネー情報から金融市場を『読み・解く』」「マーケティング情報から顧客を『読み・解く』」「会計情報から経営を『読み・解く』」「ビジネスプロフェッショナルのための交渉学」「コラジェクタ<sup>R</sup>実践」「コラボレーションを実現するリーダーシップスキル」の6つのワークショップが開発されている。各プログラムの3〜6回で構成され、定員は15〜25名。ワークショップという形式により、受講者の相互学習という効果も生み出されている。

多くを学んで帰る「学びの姿」

MCCの受講者はビジネスの現場で日々問題解決を迫られる30〜40代が中心となっている。「夕学五十講」では40代が約3割を占め、30代と50代がそれぞれ2割程度、残りの3割を20代と60代が占めている。圧倒的に男性が多く、女性は2割程度となっているが、そのほとんどが

20代後半で、起業家やマーケティングを専門とする人が多い。

受講者は多種多様な業種から参加しており、質疑応答は30分を超える。講演をエンターテインメントとして聴きにくくのではなく、本当に必要なテーマを選び、講演で多くを学んで帰るといった特徴である。

少人数で行うカンファレンスやワークショップは30代が中心で、これまで10数のプログラムへのべ500人ほどが参加している。各プログラムにはメーリングリストがあり、頻繁に議論が交わされている。受講者だけでなく、ときには講師による書き込みもあり、受講者の満足度は総じて高い。

MCC設立当初は、企業から派遣されて受講するビジネスパーソンを想定していたが、実際には自己負担で受講する個人も多く集まった。個人で受講する場合、開催日時によっては有給休暇を使って参加する人も見られる。

学んだことを現場に活かす

MCCにはまだ開発段階のものもあり、今後の展開が期待できる。当面「夕学五十講」では、より幅広く、充実した講演を提供するとともに、遠隔教育イン

フラを使った日本各地への同時配信によって受講者層を拡大することが考えられている。また、「知的基盤能力」開発ワークショップでは、定番プログラムを年間10本ほど運営すること、「先端知」サーチカンファレンスでは今後、年間4〜5本のプログラム開発が課題とされている。

MCCで学んだことをビジネスの現場で活かし、再び問題意識を持ってMCCに学ぶというサイクルはできあがりつつある。そこには、時代を先取りした学習コンテンツを軸に、学びあい、教えあい、創発しあう「知の拠点」としてのMCCの力が感じられる。

(吉澤康代)



「コミュニケーション&リーダーシップ」高木晴夫KBS教授のレクチャー

丸の内シティキャンパス(MCC)  
住所 東京都千代田区丸の内2-6-2  
丸の内八重洲ビル6階  
電話 03-5220-1311  
設立 2001年4月  
http://www.keioncc.com

慶應義塾大学と連携した社会人向け教育機関として、2001年4月より株式会社慶應学術事業会が運営。東京・丸の内・メインキャンパスを構え、丸の内再開発を進める三菱地所株式会社と提携し、大学、企業、市民の「交流の場」を目指す。丸の内エリアのビジネスパーソンや首都圏の社会人を対象にした先進的なプログラムを開発・展開している。

# 時間をかけてゆっくり学ぶ 「湘南美術散歩」

「湘南美術散歩」見学

平塚市美術館では2001年7月から「ひとワークショップクラブ」「ものワークショップクラブ」「湘南美術散歩」という3つのワークショップクラブ(以下WSC)が同時進行で運営されている。WSCとは、長期間(1年単位)で運営されるメンバー制のワークショップグループ。講師はとくに設けず、学芸員の端山聡子さんが調整ないしリーダー役を務めている。

11月9日(土)午後1時。今日は「湘南美術散歩」の開催日だ。平塚市美術館のアトリエに、ぼつぼつと人が集まって来た。男女合わせて15人ほど。平均して50〜60代が多い。

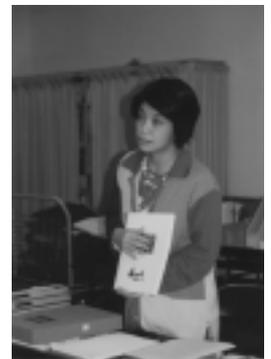
最初は「報告会」。「この1カ月に見たことを話してください」と端山さんが言う。次々に手が上がり、それぞれが1カ月間に見た展覧会の紹介を始めた。

メンバーが報告するたびに、端山さんがコメントし、それにまた違う人が答える。こうして、報告会は和気あいあいと進んでいく。

続いて「発表」と「見学」。「発表」では、メンバーの一人が、ある画家の生涯について調べてきたことを話し、「見学」は、同美術館で開催中の原精一展を見て回る。いずれも終わった後に、メンバーからさまざまな意見や感想が出され、活発な話し合いが行われた。

ゆるやか、でも「枠」がある

「湘南美術散歩」と聞くと、美術作品を見学して回る屋外中心のプログラムのような印象を受けるが、そういうわけではない。湘南の美術について「散歩」をするように、ゆっくり時間をかけて、気の向くままに学んでいく、という意味合いで付けられた名前である。



ワークショップクラブでリーダー役を務める学芸員の端山聡子さん

「参加者や私の都合に合わせてプログラムはどんどん変えていきます」と端山さんは言う。確かに、「報告」「発表」「レクチャー」「見学」など、プログラムの大枠は決まっているが、詳細は端山さんの提案と参加者の希望によって決められる。非常にゆるやかなプログラムだといえる。ただし「何でもあり」というわけではない。発表や見学は、湘南地域の美術に限定している。「湘南地域の美術」という決め事が、参加者の興味の拡散を防ぎ、深い追求を可能にする一つの「枠」となっているようだ。

長期にわたる恒常的な活動

このWSCの大きな特徴は、言うまでもなく「長期」という点である。イベント的なワークショップを開催する施設は多いが、長期に渡って恒常的にワークショップを営んでいる施設は少ない。

端山さんは、どのような動機から、このような長期のプログラムを始めたのだろうか。

「長期のよさ、短期のよさ、両方あると思うんです」と端山さんは言う。「長期のプログラムの方が、受講者にとってハードルが高いと思います。拘束時間が長い、参加しにくい、地味だし、自分から主体的に参加しないと得るものがない」。

確かに、短期のプログラムの方が、参加者にとって参加しやすい。また美術館側も、単発のワークショップであれば、参加費を徴収し、外部講師を呼ぶなど、刺激性に富むプログラムを企画することが可能。しかし、長期のワークショップでは、派手なプログラミングは困難で、参加者にとって参加するメリットが見えにくい地味なプログラムになりがちである。

そのようなデメリットを把握しながら、あえて長期のプログラムを運営しているのは、なぜなのだろうか。

端山さんは、参加者の生活や意識を変えていくようなプログラムをやってみたくったんです」と説明する。では、参加者は長期のプログラムを通して、具体的にどのように変化していくのだろうか。



「湘南美術散歩」では、参加者同士の活発な意見交換が行われる

意識の変化、興味を自分で広げる

一つのテーマについて皆と話しあい、発表しあう「場」。こうした「場」はあるようで、なかなかない。このような場に参加することが、興味や関心を自分で広げていくモチベーションになっているという。

60代男性は、「WSCに参加することが日々のアンテナをはりめぐらせることにつながっている」と話し、70代女性は、「美術館鑑賞情報などをチェックすることが多くなった。何かにつけて色や形などに目が行くようになった」と言つ。

端山さんは、「容赦なく全員当てます。必ず1回は何か発言してもらいます」と話す。「自分が見たこと、感じたこと、考えたことを、人前で言う機会は、あまりないから」だそう。

最初は進んで意見を言える人は少ないという。でも長期に渡って活動をしているうちに、ほぼ全員が発言できるようになっていくそう。

考え方の変化、互いに認めあう意見交換をするうちに、自分と違った意見も認めあうようになる。その結果、「思いこみ」が少しずつ減って、考え方の幅が広がっていくようだ。

50代女性は、「今まで好きじゃないと

決めつけていたものも、そうではないのかも、という目で見るようになりまし」と話してくれた。

「参加者相互のつながりは、それほど緊密ではないと思います」と端山さんは言う。確かに、参加者は会が終わると、皆ばらばらに帰って行くし、参加者同士のつながりは淡泊なように見える。しかし自由に意見を出しあいながらも、決して言い争いにはならない、和やかなムードがある。

年齢層は30代〜80代。年齢の幅同様、美術に関する知識や経験にも、それぞれに大きな差があるという。いろいろなレベル、立場の人がいるからこそ、お互いの違いを認めあう雰囲気は自然に生まれているようだ。

美術館にとって多くのメリット

平塚市美術館は市立の社会教育施設。よって、市民を教育するというのが、設立当初から定められたミッションである。だからこそ、教育普及担当の学芸員が1名(端山さん)という厳しい制約の中でも、活動を続けているわけだが、この「湘南美術散歩」のような活動形態は、美術館にとっても、多くのメリットがあるという。

まず第一に運営しやすいという点。端山さんの都合に合わせてプログラムを組むことができ、融通がきく。外部講師を呼ばないので費用もかからない。

第二に、参加者との情報交換が端山さん個人の情報収集に役に立っている、という点。さまざまなバックグラウンドの参加者が集まっている分、情報も多種多様で面白いとのこと。

そして第三は、このような草の根的な活動が美術館の財産になっているという点だ。このWSCに参加しているのは、地元の広報誌を見て応募してきた、地元在住の住民ばかり。彼らが生活の中に美術を取り入れて、少しずつ美術館経験、美術経験を重ねていき、美術館という存在を支える市民になることは、市立である平塚市美術館にとって、大きなベネフィットになるといえるだろう。

(三浦彩子)

平塚市美術館  
住所 平塚市西八幡1-3-13  
電話 0463-351-2111  
開館 1991年3月  
http:  
//www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/art-muse/

# 「学び」という行為の本質

ここで紹介した3つの事例は、一見バラバラなように見える。学びの提供団体の性質が、それぞれ異なり（NPO、民間企業、社会教育施設）、そこで学ばれる内容も、学ぶ人の属性も、モチベーションも三者三様だからである。しかし以下のような共通点が見出せる。

## 事例に見られる3つの共通点

これら3つの学びの場には 参加型、コミュニケーション重視型、長期型 という共通点がある。

ここで学ぶ人は、全員、主体的に参加することが求められる。具体的には、自発的に意見を述べ、他者の意見を聞くという、対等な立場における「コミュニケーション行為」である。

そのような性質上、プログラムはあ

ずと長期に渡る。「ニュースタート」では引きこもる若者たちが自主的にかかわりをやめるまでの期間、「丸の内シティキャンパス（以下MCC）」では通年の講義と数日間連続のワークショップ、平塚市美術館では通年のワークショップ、いずれも長い期間を設定している。

## 意識・生活を変える学び

参加型、コミュニケーション重視型、長期型 というスタイル自体は珍しいものではない。これらの学びの場が先端的なのは、そこで行われている学びの性質による。

ニュースタートでは、引きこもる人々に、「コミュニケーションを結び相手や仕事の場を提供し、彼らの社会復帰をサポートする。MCCでは、講義やワーク

ショップを通じて、ビジネススマンに仕事を

をする上で基盤となる力を養成する。平塚市美術館では、参加者に報告、発表、見学といったプログラムを繰り返し課すことで、参加者が自分で自分の興味を伸ばしていけるようにサポートする。これらの「学び」に共通しているのは、「学び」が狭い範囲の「目的」を達成するための「手段」に終わっていないという点である。いずれも「学び」が参加者の意識・生活を変容させるにまで至っている。

では具体的に、どのようなプロセスを経て、参加者の意識や生活が変化していくのだろうか。

これら3つの学びの場においては、優れたコーディネーターと良質な刺激のもと、「聞く（見る） 考える 話す」という行為が繰り返される。参加者はこの繰り返しによって、見て聞いて考える「主体」になっていく。そして、新しい考え方や可能性を獲得していくのである。こうした意識・生活の変容が、3つの事例の中で最も鮮烈なかたちで現れるのが、「引きこもり」の克服である。これら3つの学びの場で行われている学びは、学ぶ人の属性やニーズは異なるものの、いずれも同じ行為なのである。

社会的義務それとも個人的権利？

生涯学習論の本をひも解くと、生涯学習が叫ばれる背景には、大きく分けて2つの見地があることに気づく。一つは「社会の変化に対応するために、学ばなくてはならない」というように、生涯学習を自衛策、または社会的義務と見なす見地。もう一方は「人間らしく生きるために学びは有効なものである」というように、生涯学習を豊かに生きるための有効策、個人的な権利と見なす見地である。前者の学びの内容は、仕事上の専門知識、社会問題などであることが多く、後者は文化芸術など趣味的なものであることが多い。これまでの生涯学習論の歴史は、この2つの繰り返しといっても過言ではない。

しかし、このような生涯学習の二極化を「学び」全般に当てはめるのは早計であろう。これら3つの事例のように、学ぶ人のニーズ、属性、学ぶ内容がそれぞれ大きく異なる場合でも、学ぶ成果として得られることが等しいということはあるのである。

二極化に惑わされ、学びという行為の本質を見失ってはいけないと、自戒を込めて思う。

（三浦彩子）